

## ヨーロッパ・ツアー現地演奏会評(5)

「N響ヨーロッパ公演2020」の中から、2月24日に行われたロンドン公演について、現地メディアによる演奏会評をご紹介します。

---

Seen and Heard International  
February 25, 2020  
Colin Clarke

### ソル・ガベッタとNHK交響楽団がロンドンに感動を与える

数年前私は、日本のNHK交響楽団とパーヴォ・ヤルヴィの武満の1957年の作品《弦楽のためのレクイエム》と(休憩なしで)カップリングされた力強いマーラーの《交響曲 第6番》のレビューを書いたわけだが、今回の演奏会も武満作品が演奏された。ただ、今度は1991年という、より後年の作品で、エミリー・ディキンソンの詩から靈感を受けた《ハウ・スローザ・ウィンド》である(“How slow the wind—How slow the sea—How late their Feathers be!”ちなみに、いくつかの版では最後の『羽(フェザー)』が『父(ファザー)』になっている)。武満が主要主題として用いているのは、波の中で現れるかのような7音の連なりだ。この音楽の中にはラフマニノフの《交響曲 第2番》の緩徐楽章のパスセージを示唆するような瞬間があり、興味深かった。あるいは、今回の演奏曲目からくる勝手な連想かもしれないが、弦楽器はチューニングの面では非常に安定していたものの、もう少し音色に深みがあれば大成功と言えたかもしれない。とはいえ、なによりも雰囲気 richness に富む演奏だった。

この晩の最高潮は、ソル・ガベッタによるシューマンの《チェロ協奏曲》の素晴らしい演奏だった。これはシューマンの後期作品で、我々はすぐに武満とはまったく違う世界へと誘われ、演奏家の面々はそれにしっかりと一瞬で順応していた。ガベッタは輝かしいソリストで、見事なレガートと、捉えがたいものに対する優れた感覚によって、謎めいた後期シューマン作品のありうる限りの最適解を導き出していた。彼女は幅広く、しばしば華麗な音色を響かせていたが、ときに複雑に絡み合いながら進行する楽曲の魅力を引き出していた。さらに、ヤルヴィは最高の音楽的パートナーの一人で、オーケストラによる和音が常に適切な場面で差し挟まれていた。

中間楽章の「ゆっくりとLangsam」での、オーケストラの独奏チェロをソリストと二重奏とは、

シューマンの書法の素敵な部分だ。この部分でソリストがふと立ち止まると、さらにテクスチャが豊かになるのだ。カデンツァを伴う輝かしく華美な最終楽章は、ソリストとオーケストラ両方にとっての凱歌となった。ヤルヴィは壮大さと、魅力的な軽快さとの両方を楽曲から引き出した。この楽曲ではカデンツァにもオーケストラ伴奏があるが、この点もガベッタとヤルヴィの深い結束を証明するものとなった。

ガベッタがアンコールで演奏したのはペテリス・ヴァスケス《チェロのための本》より〈ドルチッシモ〉。彼女が定期的に取り上げるアンコール曲であろう。2016年のプロムスの第一夜で、同年ルツェルンでロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団と共演してシューマンの《チェロ協奏曲》を演奏した際も、この曲を演奏した。忘れられない小品で、要求されている超絶技巧はすべてガベッタが美しく仕上げている（演奏以外にも、チェリストに歌唱を要求するパッセージがあるのだが、それも彼女は美しくやってのけた）。

プログラム後半は幅広く感情に満ちた演奏による、ラフマニノフの《交響曲 第2番》だった。第1楽章は奏者に多くの難題を突きつける。とりわけ難しいのは、その構造の把握である。ヤルヴィの解釈はラルゴによる序奏の神秘さを重要視する、見晴らしのいいものだった（素晴らしいヴィオラ・セクションと愛らしいイングリッシュ・ホルンがアレグロ・モデラートへの道筋を形作っていた）。管楽器はきらびやかかつ完全にコントロールされていた。これがオーケストラの中で最良のセクションで、次に見事に訓練された木管楽器が続く。弦楽器はもう少し深みのある音を出せていたかもしれないし、それを率いた篠崎“まろ”史紀の音色は幾分かすれていたが、弦楽合奏はラフマニノフの激しい有頂天をしっかりと捉えていた。

最も印象に残ったのは第2楽章の軽快なアレグロ・モルトである。ヤルヴィは楽章の勢いを保ち続け、フガートに先立つ素晴らしいオーケストラの一撃を引き出した。有名なアダージョには愛らしいクラリネット独奏が含まれている。ここで木管楽器は感情の高まりのなかの星々のようにきらめいていた。NHK交響楽団がその表現力の豊かさと名高いオーケストラであるにもかかわらず、ここで東洋的な慎み深さがみられたのは、あまりにも感傷に沈溺することを避けるためだったのだろう。これは、横の線の流れを普通よりもより明瞭に — さらに、啓示的に — しようとしていたということだろう。長大な最終楽章は、解釈上の挑戦だと言える。悪しざまに言うと、その素材に比べて長すぎる音楽だと言えるかもしれないが、ヤルヴィと奏者たちは冷静さをもってこの楽章の音像を扱い、ときに音で満ち満ちたラフマニノフの楽譜の細部に、彼らの特徴をしっかりと刻みつけていた。

演奏会の終わりにはアンコールが一曲演奏された。エストニアの独立102年を記念して、我々はヘイノ・エツレルによる《弦楽のための5つの小品》より〈祖国の調べ〉を聴いた。ロンドンで日本のオーケストラと共演する以上にこのことを記念する良い方法があるだろうか、と

ヤルヴィは語っていた。そのコメントの中でアルゼンチン出身にチェリストに言及してもよ  
かっただろうと思うが、もっともなことだと感じた。